

掲載日 (2023/8/25)

書籍の概要

本書は、18世紀後半から20世紀後半の孤児や貧困児等子どもの救済事業に、医学や心理学が関与し、処遇や制度等を正当化する権威として機能していく様相を、欧米、植民地朝鮮、日本などのフィールドにおいて究明した共同研究である。医者や心理学者たちは、子どもの生命や心身の健康を研究対象とし、保護や救済活動のなかで自らの専門知の有効性や正当性、客観性を確立させていく。同時に、その過程で健康で正常、標準的な子ども規範の輪郭が徐々に鮮明化されていくのである。その具体的経緯に迫り、医学と子どもの関係の再考に寄与する。



「逸脱児」と医学

貧困階層における生殖・再生産への医学的介入、貧児、孤児などの処遇に医学はどのように介在してきたのか。18世紀後半から20世紀後半にかけて規範的な子ども像が確定していくプロセスを検証し、その枠付けに「子ども」をめぐる医学がいかに関与したかを問う。子ども史の視座から解き明かす「子ども」をめぐる医学の編年史。

医学が子どもを見出すとき

孤児、貧困児、施設児と医学をめぐる子ども史

土屋敦, 野々村淑子 編著

勁草書房/408ページ/2023年7月出版

著者から一言

子どもの教育、保護、福祉については、課題や理想像が語られることが多いと思います。そしてその多くが、それぞれの論者のなかにある規範意識に由来するものです。私たちは、日本だけではなく欧米や植民地朝鮮等、共著者の研究フィールドに定位し、そのような規範自体がつくられてきた歴史的経緯、その系譜に迫る研究を進めてきました。本著は特に医学や心理学が、子どもの生命や心身の健康に関与し始め、客観的真理を供与する知見として確立していく具体的様相に迫ります。

人間環境学研究院 野々村淑子

【お問合せ先】

九州大学人間環境学研究院 野々村淑子

E-Mail : nonomura.toshiko.868*m.kyushu-u.ac.jp

[*を@に換えてください]

目次

序章	医学が子どもを見出すとき [野々村淑子]
第I部	「医学」による「子ども」の発見
第一章	一八世紀末アメリカの医学と子ども・家族の交差
第二章	一八世紀イギリスの助産救貧をめぐる産み育てる身体の科学化
第三章	一九〇〇年前後の岡山孤児院における看護と病気
第II部	医学調査と衛生管理
第四章	二〇世紀初頭ドイツにおける「危険にさらされた子どもたち」の保護と医療の介入
第五章	二〇世紀転換期イギリスにおける子どもの栄養をめぐる「科学」的な議論
第六章	植民地朝鮮における都市細民「土幕民」の社会医学的調査
第III部	発達心理学・児童精神医学
第七章	保護複合体と愛着理論
第八章	アメリカ少年司法における医学の導入と展開
第九章	「戦災孤児」への心理学的関心
第十章	愛着理論の再浮上と施設養護の「家庭化」
終章	孤児、貧困児、施設児と医学をめぐる子ども史 [土屋敦]